

ディドロによる言語起源論

——「聾啞者に関する書翰」の註解——

末 松 壽

Il est donc bien important de ne pas réaliser nos abstractions. Pour éviter cet inconvénient je ne connois qu' un moyen, c'est de savoir développer l'origine et la génération de toutes nos notions abstraites (Condillac, 1746)

Ah! Monsieur, combien notre entendement est modifié par les signes (Diderot, 1751)

Et à l'égard des adjectifs la notion ne s'en du développer que fort difficilement (Rousseau, 1755)

Apprendre une langue, c'est apprendre comment l'on pense dans cette langue (Barthes)

序詞としておかれた三人の同時代者の数行は、あれ程互いに拮抗し合った哲学者達における関心と批判の共通性を証言する。そしてまた、二世紀半に及び論議的となった様々の相違をこえて、或いはむしろ相違の底にあったであろう彼等の深い連帯を。それらは、我々の同時代者の一文と共にここでの考察の道標となる。しかし、言語の習得がその言語において考えることを学ぶことであるという命題は、私が習得している或る特定の言語に《依って》しか私は考えることはできないということの意味するのか。我々の時代の常套句の一つ、考えるのは私ではなく言語構造が私の内で考えるのであるという、全体主義的言語の自己展開の運動を、我々はもう一度容認しなければならないのか。このいささか悲壮な言明とは一体何であったのか。それは神秘主義者の、私は思惟する、私がではない、ロゴスが私において思惟するのである¹⁾、という表白の無邪気なかつ絶望的な言い換えではなかったか。それは、超越しかつ内在する聖なる言語への無力な崇拜へと導くものではなかったか。

もっともそれが、思考と知識への言語の侵略、その占領に対する告発であったのならば事情は異なる。しかし、如何にして言語によって言語の全体化に立ち向かうというのか。抵抗のために使われる言語が、既にして、もしくは依然として、それ自体同じ悪で侵蝕され、或いはそもそも同じ悪そのものであったとしたら。ディドロは、コンディヤックと共にこの困難な業を試みるであろう。言語によって。業の困難は、統辞法への違犯、運動あるいは身振り言語の措定（コンディヤック）、そして「言葉の使用を奪われている者」を用いてのその実験検証（ディドロ）へと導くであろう。感覚印象や思惟 — それらが言語において表出さるべきものであったとしても — の言語に対する自律性を確保すること、これが『聾啞者に関する書翰』における著者の努力の一つとなる。しかし築くためには倒さねばならない。ディドロがまず分解しようと試みるのは、彼にとっての、また彼の時代における全体主義的言語、或る形而上学であった。ヴォルテールが、私は理解できない、即ち何人も理解できる筈はない、と懐疑の言を繰り返し、かつは無意味、不条理、滑稽と罵った或る形而上学とその言語体系。ヴォルテールが拒絶と罵倒に止まる時、ディドロは既に解体に着手している。我々が、哲学者における言語起源論の考察によって跡付けるのは、まさにそのことであるだろう。

1. 『書翰』の制作と構成

『聞かえかつ話す人々のための聾啞者に関する書翰』という標題は、作品が言語をめぐる考察を重要な構成要素とするであろうことを暗示する。これは1751年2月、『百科全書』第1分冊公刊（7月）に先立ち出版された²⁾。

作品制作の契機としてはおよそ三つの事情が考えられる。1. 直接の動機として、テラッソン (J. Terrasson) 神父の死によって、修辞学者バトゥ神父 (Ch. Batteux) がコレージュ・ド・フランスのギリシア・ラテン哲学の教授に任命された (1750年10月) という事件がある。ディドロは、コンディヤックやデュ・マルセを差し置いて、この神父にその書翰体の作品を宛てる (cf. *Lettre*, p. 134)。その中で彼は、バトゥの『諸芸術の同一原理』 *Les Beaux-Arts réduits à un même principe* (1746)、『文芸講義』 *Cours de Belles-Lettres* (1747-1748) 第二巻に収められた『フランス語の文章とラテン語の文章の比較に関する書翰』 *Lettres sur la phrase française comparée avec la phrase latine* の諸命題を検討するであろう³⁾。ポミエは、ディドロのバトゥに対する嫉妬や反感という

個人的感情の面を強調する (*art, cité* p. 264 sq.). 言語学史の観点からバトゥを感覚主義者と規定するリッケンは、その反駁よりはむしろ修正がディドロに『書翰』の「出発点とそれに続く展開を示唆する」(*o. c.*, p. 122)として理論的側面を強調する。

2. 思想的背景として、17世紀から続くフランス語に関する議論、特に語順の問題、統辞法における自然的順序と倒置された順序をめぐる長期にわたる論争がある。これはリッケンによれば、「既に17世紀において最も討論され、18世紀には更に討論された言語学的主題の一つ」であって、フォントネル、デュ・マルセ、ヴォルテール、コンディヤック、ディドロ、ダランベール、ルソー等が「この論争に介入せずには措かなかった」(*o. c.*, p. 9)。ディドロが介入するのはまさにこの『書翰』においてである。この論争そのものは主題ではないし、立入る余裕はないが、後に我々が会おうディドロの考察の意義を十分に理解するために、ここでラミ神父の『修辞学あるいは話す術』(1675)の1676年版の一節を見ておこう。

語順、そして言説の配置において守るべき規則については、自然の光が何をなすべきかを非常にはっきりと示してくれる(…)。あらかじめ何が主題であるかを知っていなければ、人はある言説の意味を理解できない。故に、如何なる命題においても、その主語を表現する名詞が最初に置かるべきことを自然の秩序が要求する。そしてもしそれが形容名詞に伴われるのであれば、この形容名詞がすぐそれに続くべきことを。(続いて動詞、属詞が列挙される)⁴⁾。

フランス語、正確には近代フランス語の統辞法は、まさに自然の光によって与えられる、証明を必要としない自明の秩序であるという。類似の思想は、皮肉にも、デュ・マルセ、ボーゼにより踏襲される。そしてリヴァール(1783年)によって。このような思想は、我々には国家規模の集団ナルシズムの現れとしてみえる⁵⁾。1746年にはコンディヤックによって次のように評価される。「この問題(語順転倒)について人々が誤るのは、我々の言語の性格が我々につけさせた習慣にすぎない語順をより自然的であると受取るからに他ならない⁶⁾」。ディドロも、これに関する類似のだがより尖鋭な見解を示すであろう。

3. 制作のもう一つの動機として、ディドロの思索の持続発展を挙げなければならぬ。『盲人に関する書翰』*Lettre sur les aveugles* (1749)との題名の類似は偶然ではない。彼自身、巻頭の「出版者B氏への書翰」の中で、「この作品は余り良くない別の作品を真似て作られている」と白状する時、監獄入りの原因となったあの作品を暗示している⁷⁾。事実、盲人を観察し盲人と対話することによって認識の問題を探究するという方法に類似した方法がここ

でも採用される。即ち、聾啞者に問い糺すことによって、「言語の形成についての真の観念」(o. c., p. 142)を探ろうとするのである。いずれの作品においても、ロックの、そして特にコンディヤックの『人間の認識の起源に関する試論』の衝撃は強く作用し続けている⁸⁾。とはいえ、ディドロの研究の獨創性を看過してはならない。「想像とか注意力という基本的能力の作用によってそれ自体産出された記号の発明」—特に言語記号—「のみが、感覚印象から反省への移行を保証し得る」(Le Roy, q. c., p. xv)というその原理からして『試論』は、聾啞者について次の判断を表明せざるを得なかった。

更に彼から言葉の使用を奪ってみよ。あなたが彼を如何に狭い限界の内に閉ぢこめることになるかは、啞の境偶があなたに教えてくれるだろう⁹⁾。

先行者がそこで留まるのに対して、ディドロはむしろそこから探究を開始する。

☆

作者は、この『書翰』が「話しかつ聴く(=理解する)術を有する極く少数の人々にしか役立たない」(p. 131)と書いている。(“entendre”はここで二義性を有する。cf. p. 181)。これは「雲を散らすよりはむしろ起す」(p. 162)難解な作品である。如何なる主題が検討されるのか。ディドロ自身「多様な問題」が扱われることを認め(p. 133)、これを“迷路”と呼ぶだけあって、作品の終りに自ら要点をまとめている¹⁰⁾。しかしこれは3ページにも及ぶ。逆に簡単すぎるきらいはあるが、ここでは『書翰』の副題を引用することで満足しよう。

そこでは、語順転倒の起源、文体の調和、崇高な状況、大部分の古代近代の諸言語に対するフランス語の若干の利点、そして時に応じて、諸芸術に特有の表現が論じられる(o. c., p. 134)。

これでは重要な主題の幾つかが脱落してしまう¹¹⁾。実際、我々が考察する言語起源の問題は語順転倒の主題に含められている。その理由は何か。

2. 言語の形成

語順転倒の問題をよく扱うためには、如何にして諸言語が形成されたかを吟味することが正しいと私は思う(o. c., p. 135)。

ディドロにおいては、『不平等論』のルソーにおいてとは異なり¹²⁾、統辞論という文法学上の主題—もっともそれは精神における概念のあり方の研究、18世紀後半に出現した言葉の意味で“idéologie”という哲学上の問題とからなっている—が言語起源ないしは形成に関する考察を要請する。ディドロは、言

語起源不可能の展望から思弁を進めるルソーの意図的に遅々とした歩みとは違って、早速、身振りでも自然の叫びでもない音声言語形成の段落づけを行なう。そしてまたその各時点において精神が蒙っていく変様を示す。時や順序を示す副詞が段階区分の指標となる。

第一段階：

可感的対象がまず諸感覚を打った。そして幾つもの可感的性質を同時に合せもつものが最初に命名された。それはこの世界を構成する様々の個物である (*Ibid.*)。

これは勿論、コンディヤックの「言葉は長い間、木、果実、水、火等の名称のような可感的事物に与えられた名称以外の語をもたないまゝであった」(*o. c.*, II, I, ch. 9, § 82, p. 83 a)に対応する。唯、ディドロはその先達よりも更に厳格な感覚主義を表明している。可感的対象の中でも、「幾つもの可感的性質を同時に併せもつもの」を最初の中でも最初に置いているからである。その後、数少ない可感的性質を有するものがあれば、それらが命名されよう。用語の厳密さにおいても、ディドロは『試論』のテキストに唯一つの、しかし以下の考察において重大な意味をもつこととなる変更を加える。『試論』はすぐ続いて、「実体の複合的観念」の名称から「より単純な観念の記号」への分岐発展を語る (*Ibid.*)。たとえば、木という名に続いて、幹、枝、葉…という名が作られる。コンディヤックは可感的事物をそのまま実体 (*substance*) と言い換えるのである。ディドロはこの語を避けて「個物」(*individu*) と言う。これが彼の修正である。発明の第一段階は可感的対象、個物の命名である。

しかし、『試論』のもう一人の読者は問う、木とか果実という名は、個物ではなく既に種概念の記号ではないのか。『試論』の教義をこれまた可能な限り純化し先鋭化するルソーが更に大胆な命題を付け加える。最初の名称は、絶対的に個物のそれである故に全て固有名詞であった、と (*o. c.*, pp. 149, 150)。ディドロのいわゆる個物の名称は、ここで彼にとって逆説的な、しかし不可避の定義を受けることになる。

第二段階：

次に可感的性質がそれぞれ区別された。それらに名称が与えられた。それが大部分の形容名詞である (*Ibid.*)。

ここもまた『試論』の説に照応する：「次に、しかし少しずつ、対象の様々の可感的性質が区別された」。それらに与えられた語とは「形容名詞と副詞であった」(*o. c.*, II, I, ch. 9, § 82, p. 83 a)。副詞は、ルソーにおいて

と同様に、ディドロの品詞生成論においてもまだ出現しない。「次に、しかし少しずつ」*ensuite, mais peu à peu*。これがコンディヤックの一種の精神現象学（感覚的知覚から反省意識に至るノエティックな様態の生成的記述）を、代補（*supplément*）の思想と共に特色づける（漸進的）性格の一例である。感覚論の純粋化の果てに起源のアポリアを目指すルソーにおいては、「形容名詞についてはその観念が発達するのは極めて困難（*fort difficilement*）であったに違いない」（*o. c.*, p. 149）となり、《困難》の相をまとう。これは彼の言語起源論において恒常的特性となる。可感的性質の命名、形容名詞、これが第二段階を画する。（*adjectif* を形容名詞と翻訳することについては後に触れる）。

第三段階：

最後に、これらの可感的性質を抽象して、人はこれら全ての個物のうちに何か共通のものを見出した、或いは見出せると信じた。例えば不可侵透性、延長、色彩、形態等である。そして形而上的・一般的名称、それにほとんど全ての実体名詞が形成された（*Ibid.*）。

冒頭の *abstraction faite de (ces qualités sensibles)* は、現在それが通常もつところの（…を捨象して）のではなく、逆に（これらの可感的性質を）《取り出して》《抽出して》の意味である¹³。でなければ、何から、何を基にしてこれらの形而上的名称（*les noms métaphysiques*）が形成されるのか不明になる。それに色彩等が感覚的性質であることは言うまでもない。この用語は『試論』における《抽象》の定義と類比的である。

自分の観念を区別して、人は時にそれ（基体）に最も本質的な性質ですらそれから完全に分離されたものとする。これがより特殊的に抽象する（*abstraire*）と呼ばれるものである（*o. c.*, I, II, ch. 6, § 57, p. 24 a）。

尤も先導者の文章は、ディドロの第二第三の両段階に区別なしに対応すると思われる。

ディドロが語るのは、形容詞のいわゆる実体詞化（*substantivation*）である。例えば、*impénétrable* > *impénétrabilité*（不可侵透性）、*étendu* > *étendue*（延長）…のように。ところでこれらの実体名詞は、「全てこれらの個物のうちに」あたかもあるとされた何か共通の《もの》（*quelque chose de commun*）を個物から分離して指示すべく要請されたという。この言表は注意深く読まねばならない。それは二つの側面を有する。a）性質（*qualité*）が物（*chose*）と見做されるという事物化（*réalisation*）の過程。b）これら分離され事物化される性質が全ての個体に《共通》とされる

事態。既に第一段階でも、個物のうちには「幾つもの可感的性質を同時に併せもつもの」とそうでないものとの存在が示唆されていた。とすれば、不可侵透性、延長、色彩、形態は果してこれら個物の全てに《共通》のものと言えるであろうか。

まずコンディヤックを参照しよう。「何か共通のもの」に対応する『試論』の表現は、次の文中、括弧()を付す部分である。

この種の観念(抽象観念)は故に、《互いに似通っている》(par où elles se ressemblent) 側面からみられた事物に我々が与えた名称に他ならない。それ故これらは「一般概念」と呼ばれる(*o. c.*, I, V, § 1, p. 49 a).

次に、何よりディドロの文章が一つの明白な自己修正を含むことに注意しよう。彼は「《人々》はこれら全ての個物のうちに何か共通のものを見出した、或いは見出せると《信じた》」と書いている。人々の空想や臆見、更に言えば錯覚が問題なのである。従って、不可侵透性等がこれら個物の全てに共通かどうかを問うて、暗い迷路に殊更に入り込むことはない。

形容詞の実体詞化はコンディヤックも論じている。まず形容名詞の成立、次でその実体詞化が説かれる。

人々が対象の様々の性質に注目し始めた時(…)、彼等はそれらが、よってもって基体がまわれているところの何かであると見た。彼等がそれらに与えた名称は、従ってこの基体の或る観念を含まねばならなかった。「大きい」とか「油断ない」とかいう語がこれである。そのあと、自ら作り上げた観念をもう一度考えて、新しい思惟をより便利に表現しようようにそれらを分解せざるを得なかった。まさにその時、諸性質は基体から区別されて「大きさ」とか「油断なさ」等の抽象的実体名詞が作られた(*o. c.*, II, I, ch. 9, § 93, p. 85 a).

ここには、後に取り上げるポール・ロワイヤルの形容名詞の理論が、そのまま、但し歴史的発展という新たな視野の内で踏襲されている。そしてルソーは、形容名詞の成立そのものに既に高度の抽象性を要請する。

なぜならば、あらゆる形容名詞が抽象的語であり、抽象作用は苦しく、余り自然的でない作用である…(*o. c.*, p. 149).

さて、実体詞形成は逆に精神に決定的な影響を与えずにはおかない。既に形容名詞の存在が「何か共通のもの」の存在を措定することを人に思いつかせ、かくして抽象的実体詞の形成を促したのではないか。精神が創造(想像)した言語上の事象が、再び精神に跳ね返ってくる。この反作用こそ、ディドロが示す語の有する悟性形成力、或いは悟性歪曲の力、精神の言語による《世界組織》の力である¹⁴⁾。人は、自分が論理に依って、論理において思索し、或いは

むしろ内在する包括者ロゴスが自分の内で自分とは自律的に自己運動している
と信じるかもしれないが、そのロゴスとは実は、特定の国語の構造に他ならな
いのではないか。「あゝ！とディドロはバトゥに呼びかける、何と我々の悟性
は記号によって変様されていることか」(o. c., p. 162).

第四段階：

少しづつ人は、これらの名称が現実の存在者を表象していると思うことに慣れてい
った。可感的性質は単なる偶有とみられた。そして人は形容名詞が現実の実体名詞に従属
していると想像した。実体名詞は本来は何ものでもなく、《形容名詞こそ全てであるの
に》(o. c., p. 135. 原文のイタリックは()に変更)。

最初の文は前の段階に接続している。実体名詞の確立が実現された時、人はそ
れが現実の存在者 (des êtres réels) を関説物として有すると見做すので
あるが、そういう見方が習慣となっていく。『試論』も類似の指摘をしている：

これらの記号の使用が親しいものになるや否やその起源は忘れられた。そして人は、
それらが精神的な事柄の最も自然な名称であると信じる誤謬に陥った (o. c., II, I,
ch. 9, § 104, p. 88 a).

その結果、二つの新しい事態が生じる。一つは形而上学的事態であり、他の
一つは文法学的事態である。1° 形而上学の結果：実体名詞となった形容名詞
の関説物はまだ語られないところのもの、《実体》、の偶有 accidents として
把握される。名指されない《実体》の概念が当然ここで措定される。唯これは
冒頭に出現した「可感的対象」の概念とは全く異なる（案内者はこの二つを混
同した）。先にその形成が語られた名称の示す所記は非分析的であった。そこ
には、今問題になっている実体と偶有との識別はなく——そのような観念はま
だなく——あれこれの延長、形、色等を有し、そしてそれ故に命名が可能にな
る具体的個物の名称があった。ところが発生したばかりの形而上学は、延長等
々を《実体》において存在し実体そのものからは区別されるところの偶有と見
做す。この認識は分析的である。2° 文法学の結果：上の事態に対応して一つ
の文法学が誕生する。あたかも偶有が実体に従属してのみ存在するように、偶
有を関説物として有する形容名詞は実体を関説物とする実体名詞に従属するこ
とになる（ポール・ロワイヤルの理論そのものが出現している）。これは一つ
の倒錯である。というのもこの文法学は、形成の順序において先行する形容名
詞（第二段階）を、そこから発して成立するところの《抽象的》実体名詞（第
三段階）に隷従させてしまうのであるから。

そして以上二つの事態は厳密に相関的であって、相互に補強し合うであろう。

即ち、一つの全体的な世界組織、世界観としての学知がここに確立される。ところが実際には、と作者は言う、「実体名詞は本来は何ものでもない(rien)」。つまり無である。その関説物であるべきでもあろうものは存在しない。かくしてこの語は不在の関説物を表象する概念の能記として機能するであろう。逆に「形容名詞こそ全て(tout)」。即ちその関説物たる可感的性質が全てである。かくしてこの語は不在の《実体》を指示する概念の名称に従属して機能する能記となる。この学知は故に、その中心に非存在を擁することになる。

☆

更に続く『書翰』のテキストを読む前に、以上の指摘の哲学史及び言語学史上の射程をここで簡単に計っておこう。

先ず、「形容名詞こそ全て」という命題について、シュイエは、ディドロの理論には単純化と硬化の方針が一貫していて、それが「彼をその手本より遠くまで連れていく。彼より前には誰も、《形容名詞こそ全て》等と主張する冒険を試みることはなかった」(note 17, p. 136)と記している。もし哲学者の命題を、その直前にある《réelement》(現実的に)という副詞の示唆に従って我々がそうしたように、文法学が不可分に対応するところの形而上学(それは現実世界を対象とする学知であろう)における実体の否定と理解するならば、これは夙に、もしかしたら1730年代(異説もある)に、懐疑論の教説を紹介・検討するヴォルテールのテキストの中で書かれていたことを指摘しよう。

彼等はつけ加えて言う。ある対象をみる時我々は色や形を知覚する。我々は音をきく。そして我々はこれら全てをこの事物の様態(modes)と呼びたがった。しかしこの物の実体(substance)は如何なるものか? (...)我々がかくも大胆に実体と命名するものは、実はこれら様態の集合に他ならない。この木から、木の観念をあなたに与えていたところのこの色やこの外形を取り去りなさい。何がそこに残るだろうか¹⁵⁾。様態の集合(l'assemblage de ces modes)以外に実体なるものはないというこの命題へのヴォルテール本人の賛意の度は十分には定め難い。というのは、他方、実体とは如何なるものかという疑問、またそれを人は認識し得ないとする言明はヴォルテールの文献には頻出するもの¹⁶⁾、この章においては、彼は「外的対象は実際に存在するか」という大きな問題を検討するのであって、哲学者達の言明の各々についての論評をしないからである。しかし、少なくともこの命題ないしそれに類する教説は『形而上学論』制作以前に誰かによって言われたのであろうし、それはもしかしたら、同じ文段で引用される三世紀のセクストゥス・エンプirikスかもしれないのである。勿論、ディドロの言葉を一種の換喩表現にとらずして、文法学のみに限定することが可能であれば、その

限りにおいては註釈者の指摘は正確なのであろう。唯、このように驚くべき思想の出合いは、『書翰』の手本としてロックやコンディヤックのみを考えるのは不十分で、もっと根の深い懷疑主義の伝統も考慮に入れるべきことを教えるであろう。

ディドロの理論が、スコラやデカルトの哲学をある意味で解剖する結果になっているという点は、より確実に指摘できる。言語の形成発展と相補的にある種の形而上学が構築されるとすれば、抽象名詞の形成のおかげで実体や偶有の概念が可能になるとすれば、これらをめぐるスコラの論理学・存在論は、その構築のメカニズムを解明されて、ラテン語の構造の反映の位置に墮すことになりはしないか。ひろがった (étendu) から延長 (étendue) なる実体詞化が行なわれ、それがあらゆる物体に共通のものと思われられるに至るとすれば、デカルトの理性 (思惟) / 物体 (延長) の図式もその存在論的根拠を半ば穿たれることになる。形態 (figure) や、まもなく出てくる運動 (mouvement) の概念についても同様であるとすれば、その自然哲学もまた侵蝕されざるを得ない¹⁷⁾。

最後に、従って (というのは、それが根本においてスコラのデカルト主義ともいうべき思想の荷い手達の筆になるからであるが)、抽象名詞の関説物を実在者と見做すことに由来する二重の事態の指摘は、全体的に『ポール・ロワイヤル文法』の品詞論とそれを支える存在論の成立の真相を暴くことになる。それは次の数行によって明らかになる。

我々の思惟の対象は、或いは事物 (choses), 例えば地球, 太陽, 水, 木であり, 普通それは実体 (substance) とよばれる。或いは事物の様態 (manière), 例えば丸い, 赤い, 固い, 知ある等であって, これは偶有 (accident) と呼ばれる。

そして事物や実体と, 事物の様態或いは偶有との間にはこの相違がある。即ち実体はそれ自身によって存続するが, それに対して偶有は実体によってしかありえない。

このことが, 思惟の対象を意味する語の間に主要な相違をつくった。というのも, 実体を意味する語は《実体名詞》と呼ばれたのであり, 偶有を, それらが適当するところの基体を示しつつ意味する語は《形容名詞》とよばれたからである¹⁸⁾。

存在論から言語へと演繹するこの体系的思想をここで詳細に論ずることはできない。唯, 指摘しなければならないのは, 1° 文法的範疇 (類) である名詞 (noms) が, 二つの下位範疇 (種) つまり実体詞と形容詞に分割されることである。この命名法, 従って文法体系は, ギョームによれば, デュ・マルセによっても維持されるという。言語学者はこの命名法を評価し, その廃止の事情についても簡単に触れている¹⁹⁾。我々としては, それが中世以来の伝統である

こと、そこにラミ神父やコンディヤックをつけ加えるべきこと（既出『試論』Ⅱ，Ⅰ，ch，9，§ 93 参照），そして形容詞を性質の名（nom = 名詞）と定義する以上ディドロも、（それに恐らく間違いなくルソーも）加えなければならないことを註記しておこう²⁰。因にフルティエールによる定義を挙げる。

これは表現されるにせよ暗に了解されるにせよ、常に別の名詞に加えられる名詞（nom）であり、その諸性質の一つを示す。それは非常にしばしば実体名詞に変る（Furetière, *Le Dict. Universel* (1690), I, art. "Adjectif").

2° アルノオとランスロは、《事物》即《実体》と置き換え（コンディヤックもこれに倣う）、この実体と偶有とを識別していく。それに関連して、「木」を例に挙げる時、彼等が既に類概念を導入しているという過失も『試論』作者が踏襲したことを我々は知っている。

存在論的に、偶有は自ら存続する実体によってしかあり得ない。ではそれらの記号である実体名詞と形容名詞とは言説の中でどう機能するか。

こうして、赤い（*rouge*）の判明な意味は赤さ（*rougeur*）である。しかし赤いはこの赤さの基体を不分明に示しつつ赤さを意味する。それ故に赤いは言説において単独では存続できない。なぜならば、人はそこにおいて、この基体を意味するところの語を表示するか暗示するかしなければならないのである²¹。

こうして形容名詞は、付加的にであれ属詞としてであれ、実体名詞（又は代名詞）に依存する。少くとも、それらを「不分明に示す」という形で（それ故にそれは名詞なのである）、それらに関連してでなければ存続できない。これは先にみた『試論』の形容名詞生成論の模範に他ならない。対して『書翰』の生成論は、これを批判的に再構成したことを確認しよう。

ポール・ロワイヤルは、文法が人間理性の自然的法則である論理に対応しそれに基礎をもつとする。しかし『書翰』の分析よりすれば、彼等のいわゆる論理とは実は彼等の親しんだ言語の事実から取り出された抽象、言語事象の合理化である。彼等の企ては、言語事実の抽象たる論理を用いて再び言語事実を説明するという一つの循環の中に居つくことに他ならない。これがディドロの仮定の理論からなされる『一般文法』の解体作業である。

テキストに戻ろう。言語と精神の同時的形成のこの時点において何が起るか。

3. 二つの語順

物体とは何であるかとあなたが問われるとしよう。あなたは答えよう。それは「実体延長をもち、不可侵透で、形をもち、色彩をもち、動く」と。しかし、この定義から全ての形容名詞を取り去りなさい。あなたが「実体」と呼ぶところのその空想的存在には

何が残るであろうか。もし同じ定義において、自然的語順に従って用語を並べようと欲するならば人は言うでもあろう。「色彩をもち、形をもち、延長をもち、不可侵透の、動く実体」と (*o. c.*, p. 135-136. 原文の斜字体は括弧「」に変更)。

語順を異にする二つの定義がある。第一はまず実体と規定し、それに様々の形容名詞を付加する。(和訳は、日本語の統辞法を無視して原文の語順に従っている)。第二はその逆に、諸性質を示す形容名詞を与えたあと、最後に実体という語を加える。最初のは、第四段階までに示された形而上学と文法学との同時的成立を踏まえた解答であり²²⁾、これらの形容名詞は、その示す性質がいずれも実体の偶有である限りにおいてそれに従属するものとして付加されている。定義で本質的なのは物体を実体と規定することにある。「形容名詞こそ全て」と書いていた著者は、ここでもそれを別様に反復する。追加される、従って二次的三次的と考えられる筈の形容名詞を除いてしまえばどうなるか。これは当然、先に参照したヴォルテールの間を想起させる。更に著者は、明確な距離を設けて言う：「《あなた》が実体と呼ぶその《空想的》存在」。それは私の用語ではない、それは虚構に過ぎない、と。

それに対して、もう一つの定義をディドロは自然的語順 (*ordre naturel*) と呼ぶ。自然的語順とは何か。この困難な表現を考えなければならない。迷路の暗い細道に入らなければならない。まずテキストに更なる説明を求めよう。ディドロは少し先で書いている。

私は概念の「自然的順序」という。なぜならば、ここで「自然的順序」を「制度的順序」そしていわば「学問的順序」、即ち、言語が全く形成された時点での精神の見方のそれ (*celui des vues de l'esprit*) から区別しなければならない (*o. c.*, p. 137. 原文の斜字体は括弧に変更。又 (*ordre*) は順序と訳出)。

《自然的》は《制度的》 (*d'institution*) と対立し、そして後者は「いわば学問的」 (*scientifique*) とも呼ばれるのであるから、後者の意味を限定して次のように言うべきであろうか。もし自然的語順に従う人がいるとしたら、その人は言語のもつあの学知形成における決定的作用からは完全に免がれているべきであると。それは、言語を使用できるのに、言語において或いは言語によっては考えることをしない人であろう。言語の影響を受けずに知覚し、その知覚を言語で、しかし言語からは自律的に表出し得ると仮定される人。これは不可能な事態の仮説である。「我々の悟性が記号によって変様されている」限りにおいて。また「言語を《知っている》こととは、如何にしてこの言語において考えるかを《知っている》ことである」限りにおいて。

しかし定義は、更に、もう少し異なる事柄を表現しようとしているかとも思

われる。上の理解には若干の不正確も混じっている。仮設の内容が不可能事で純粹に觀念的であるばかりか、仮設の表現がそもそも時代錯誤なのではないか。《実体》という語の成立は、同時に実体と偶有との識別、そして形容名詞の実体名詞化、ひいてはまた後者の事物化を含まないことはできない。ところがここには、《自然的》としながら、既に優れて形而上学的な、従って極めて制度的な概念が使用されている。だが注意しよう。語順が觀念の自然的秩序に適うということは、その《語順》を構成する各語の《存立》が自然的であるということの意味しはしない。この二つを混同してはならない。換言すれば、定義において要請されるのは、既にもはや自然のうちでない語を用いて、自然的語順に従ったならばという仮定のもとに配列し直すことなのである。要するに、制度的な単位、人為的な要素を、仮に、しかし強制的に借用させられて——新しい定義は他ならぬ「これらの用語」を並べねばならない——そこで出現する連辞構造は自然的なのである。その意味ではこれは、『書翰』にまもなく登場する聾啞者がそうであるように、既に《とり決め》《約束》による自然(nature de convention)である。それは、言語による媒介なしに知覚を形成し、それを言語において表出せねばならずまた表出できるという仮定を立てる限りで、『試論』の自然記述の方法の続行である。この定義にみられる統辞法の違反こそ、フランス語での表現不可能なこの事態を猶かつ表出しようとする意図を示していよう。

二つ目の定義について著者はこうも書く。

この順序でこそ、私には思われるのであるが、ある物体を初めて見るでもあろう人に物質の諸部分の様々な性質は作用するであろう(o. c., p. 136).

仔細に見れば、定義におけるあれらの形容名詞の配列も、実は無意味な順序、(at random) ではないことが判明する。

まず目が形態、色彩及び延長に打たれるであろう。触覚が次に物体に接近してその不可侵透性を発見するであろう。そして視覚と触覚とが可動性を確かめるであろう(Ibid.).

従って、觀念生成の自然的順序は、1° colorée, figurée, étendue (視覚), 2° impénétrable (触覚), 3° mobile (視覚と触覚)である。最後の引用文では、視覚による把握が形態、色彩、延長となって、前二者が入れ替わっている。これら三性質は恐らく《同時に》知覚されるのである(p. 163 参照)。ここでは人は、認識能力としてまだ目と手しか有しないもの(一種の聾啞者)と仮定されていることもわかる。しかし我々は今難問を前にしている。

4. 形容名詞：二つの系譜？

「初めて物体を見るでもあろう」と仮定される者が、まず色や形等を知覚するという命題は、我々が読んだディドロによる言語形成の段落づけに反するのではないか。第一段階をとばして第二ないしは第三段階から始めることではないのか。作者は1ページ前に示した開始を忘れてしまったのか。このように考えた学者もいる。『不平等論』の註釈者ジャン・スタロバンスキー、また言語学史の大著『言語学と歴史の呼び声』の著者ダニエル・ドロワクスがその例である。ディドロ自身、二つの語順の呼び名、即ち“ordre naturel”/“ordre d’institution”を与えた後、次のように書く。

ふつう可感的性質を表象する形容名詞が、観念の自然的順序においては第一である。しかし哲学者にとっては、或いはむしろ抽象的実体名詞を現実的存在者と見做すことに慣れた多くの哲学者にとっては、これらの実体名詞が学問的順序において先頭を歩む。それらは、彼等の話し方に従えば、形容名詞を受けるもの（support）或いは支えるもの（soutien）であるのだから。こうして我々が与えた物体の二つの定義のうち、第一のものは学問的又は制度的順序に従い、第二のものは自然的順序に従っている（*o.c.*, p. 137）。

これが上に名指した人々の解釈の根拠になる。事実、スタロバンスキーは、ルソーによるあの形容名詞発達の困難をめぐる條に註釈して、

形容詞発達ののろさについては、ルソーはコンディヤックに賛成する。（…）しかしディドロは全く逆に（次のように）考える（“Notes et Variantes”, *O.C.*, III, p. 1326）

として、ディドロの上の文（……ou le soutien des adjectifs まで）を復原している。文脈を捨象したかゝる抜粋で結論を急ぐのは危険ではないだろうか。ドロワクスは、全体としてチョムスキーを批判するその序文1において、アールスレフ²³⁾を引きながら書く。

「ポール・ロワイヤルの文法は、名詞とか動詞のようなある部類の語は、他の部類の語に対して基礎的であることを主張していた」：「言語の生成の研究がこの問題を、言説のあれこれの部分の年代的先行性と、他の部類が導入されていった仕方の問題に転換する」（Aarsleff, p. 579. 註釈による）。ディドロが、『聾啞者に関する書翰』の中で、「形容詞の、一つではなく二つの系譜を呈示する時」（デュ・マルセと）さ程違った二元論に従って行うわけではない。最初には、語の出現の古典的順序が尊重される。即ち、「具体的名詞、形容詞、抽象名詞」。「次に第二の場においては、ディドロは自分が具体的名詞に与えた卓越せる位置を忘れて、その新たな系列の冒頭に形容詞をおく…」理念的・論理的順序と経験的順序とが共存している²⁴⁾。

著者によれば、第一の系譜は古典的な論理主義の観点であり、第二のそれこそ、ディドロがうっかり暴露している感覚主義的・歴史（主義）的本音である。か

かる二つの系譜の共存は、それ自体、西洋の知における理性主義から歴史的観点への滑りの過渡的現象であって、同様の二元論の例は『百科全書』の文法学者デュ・マルセやボーゼにも見られるという (a. c., p. 16).

全体的展望、またシュイエに従っての²⁵⁾、デュ・マルセにおける語の二重の意味の説明の例はさて置き、ディドロが、1ページ前に書いたことを忘れて全く別の形成順序を提出しているというこの判断は正しいのか。もしここで、対立・矛盾し合い、従って論旨を破壊せずにはおかない二つの相異なる系譜、ひいては二つの体系が問題であるとすれば、そのような度忘れは常識的にありえないと筆者には思われる。作家は、苟も公刊しようとする作品を、或いは書きつつ或いは筆を擱いて何度も読み返さないであろうか。ディドロはといえば、「再見され、訂正増補された」としてこの作品を出版社に送るのである²⁶⁾。これは、言語及び人間的認識の形成という我々の主題の根本にかかわる問題であるが故に再検討する必要がある。それに、このような説が、18世紀学者や言語学史家の間に行き渡っている可能性もある。

アールスレフドロワクスの判断のどこに難点があるか。1° 彼等のいわゆるディドロによる第一の系譜は果して古典的であり理念的であるだろうか。彼は成程そこで冒頭に名詞を置く。だがそれは、例えばポール・ロワイヤル(またコンディヤック)にとっての如く、《実体》の記号ではなく《具体的》名詞、即ち《感覚》に落ちる諸性質をもった《個物》の名称である。それに、ランスロやアルノオにとっては、諸品詞出現の時間的、通時的順序はほとんど全く問題にならず、ドロワクスがアールスレフと共に数行前に指摘している通り、演繹的な、即ち理性にとっての位階秩序が問題であった。一体「語の出現の古典的順序」とは何を指しうるのか。以上の理由によって、第一の系譜に「理念的、論理的順序」を読み取ることは不可能である。それは既に疑いもなく経験的であり感覚主義的である。

2° いわゆる「第二の系譜」についてはどうか。彼等は、ディドロの議論に見られる二つの契機を十分に見分けなかったように思われる。既に述べたように、第二の定義を行うとき著者が試みるのは、使用すべしという強制のもとに与えられた、《実体》なる実体名詞と諸性質を示す形容名詞とを配列し直すことであって、それは個物の非分析的命名の段階ではもはやない。ディドロは古典論理学に従って、名称の定義 (definitio nominis) と事物の定義 (definitio rei) とを区別し²⁷⁾、これらを弁証の異なる二点 — その関係は通時的である — に置いているのである。冒頭には名称の定義を、そして二つの語順の條には事

物の定義を。同様に、スタロバンスキーが引いた文、

Les adjectifs, représentant pour l'ordinaire les qualités sensibles, sont les premiers dans l'ordre naturel des idées (p. 137).

これも、後のモメントに位置づけて理解し得るのではないか。シュイエもこの意味で解説している：

ディドロは形容詞の最初のとは異なる第二の系譜を提示するように見える。実際には形容詞生成の順序は、《可感的対象》を指示する名称に対しては第二であり、《形而上的名称》に対しては第一である (note 17, p. 136)。

先行する文段も、この文章が見出される文段も二つの語順による定義の比較のみを行っている。前者はあの自然的順序と制度上の順序を対照しているし、後者も形容名詞と実体名詞にしか言及しない。そこから我々は、この文脈においては、これら二つのものの順序決定のみが問われていると判断するのである。尤も、上の命題を抽象することが許されるならば、そしてそれを字義に即して読む限りにおいては、全く逆にスタロバンスキーの解釈も可能になる。ひいては、新たな形容詞の系譜の出現を見るというアールスレフドワクスの見解も。個物の名称の不在から、不在の故にもはや論議はその段階にないと見做すか、逆に論議者は別の思想を表現しているとするか。この点については必ずしも断定的なことは言えない。我々の解釈も今はまだ一つの仮設の域を出ないことを認めよう。

論議の契機の弁別は実際余り容易ではない。(それ故にシュイエも殊更に上のように註釈しなければならなかった)。それどころか、この区分を確実に廃止する文も著者は挿入していたのである。既に見た、

C'est dans cet ordre que les différentes qualités des portions de la matière affecteraient, ce me semble, un homme qui verrait un corps pour la première fois (p. 136)

がそれである。テキストの整合的理解の試みは再び難関に直面する。「初めてある物体を見るでもあろう人」。当然これは我々を言語形成の起源に連れ戻す。そこでは「世界を構成する様々の個物」が先ず命名されたとある。個物と諸性質、第一段階と第二段階とがここでは転倒しているようにも見える。しかし注意しよう。第一段階は既に「可感的性質」に言及していた。そしてこれらの性質ゆえに個物の命名は為され得た。ディドロは今、ここで、初源まで溯って、個物の命名に先立ちそこに至る経過を説明していると考えなければならない。実際このテキストでは、諸性質の《命名》ではなく、それらが人に及ぼす《作

用) (action d' affecter), それらの《知覚》の順序が語られているにすぎない。そして知覚と命名とは、また契機を異にする筈である。人は先づ、目によって色、形、延長の、次に手を通じて硬さの、最後に双方によって動きの印象を受け取る。それによって、これら諸性質を併せもつ個体がまず名前を受ける。だがこの時、人はまだ、個物の命名を促したこれらの性質を分析し、個別的に概念化することを知らず、故にまた命名することも知らない。それは《次に》行なわれよう。このように解釈する時、転倒あるいは矛盾と見えたものは雲散し、両テキストは完全に整合する。

以上の分析が正しければ、あの「形容名詞が觀念の自然的順序においては第一である」という文章の謎のみが未解決のまゝ残る。それを筆者は、弁証のモメントを識別してその一つに位置づけることを提案した。勿論この仮設は、当の文章の内に根拠をもたず、それが置かれた環境の考慮ということにのみ依っている。それは、ディドロの理論の一貫性を救おうとする、過度に好意的な決定にすぎないという反論もありうる。しかし、与えられた作品全体の巨大文脈に訴えることがまだ残されている。これをもって我々は最後の証明としよう。蓋然的でしかなかった仮説は確実性に変るであろう。かなり後で、生来の聾啞者との対話の経験をふまえて、言語における時制の発達の困難について語る時、著者は再び冒頭の理論に言及する。

私が、言語の起源において人々は諸感覚の主な対象に名前を与えることから始めた、果実に、水に、樹木に、動物に、蛇その他に、情念に、場所に、人その他に、性質に、量に、時間その他に、と言って正しかったとすれば、私は更につけ加えることができる。時間の、又は持続の諸部分の記号は最後に発明された、と (o. c., p. 152. 原文では、列挙される例は二度目の《時間》なる語も含めて全て斜字体。そのうち《水》以外は全て複数である)。

多数の例が、《その他》 etc. の使用によって三大グループに分割されている。分割はこれまた通時軸上でなされる。性質従って形容名詞が第三群の先頭をしか占めないことにも注目しよう。勿論、第一の系列が「諸感覚の主な対象」(les principaux objets des sens) であり、これが第一段階のいう「可感的対象」(les objets sensibles), 「様々の個物」(les différents individus) であることは明白である。1 ページ後では忘れていた具体的名詞のことを、ディドロは15ページ後では幸いにも想い出す等というべきであろうか。ラングル人の知性はそれ程絶えず方向を変えて回る風見ではあるまい。

ディドロは、この『書翰』において、唯一の品詞生成の系譜しか提出していないと我々は結論する。従って、テキストに論理主義と感覚主義の二元論的共

存を読み取るのもはや問題にならない。彼は感覚主義理論の構築においてもっと先まで行く。世界の誕生、言語の起源をめぐる思弁をうち切って、次に彼が提案する研究方法、「実験」(expériences) (p. 138)の使用もこの意味で理解すべきである。少くとも、その形成の逆説的虚構を暴くことによって、作者は古典的思考(たとえばポール・ロワイヤルのそれ)の解体を始めている。制度上の語順に従う物体の定義を与えた時も、形容名詞を取り去るならばどうなるかと直ちに問うていたことを見逃してはならない。論理主義への攻撃は、「哲学者(un philosophe)にとって」——ここで単数不定冠詞はその身分に属する者を、いわば非限定的特称とでもいうべき形で総称する——と書いたあと、「或いはむしろ抽象的実体名詞を現実の存在者と見做すことに慣れた多くの哲学者達」(bien des philosophes qui ...)——これは同じ身分に属する者のうち或る特定の群を《限定》抽出する——と、僅かのしかし重要な修正をコンディヤック²⁸⁾と自己自身に加える時まで続く。『試論』の勧告：

従って、我々の抽象の所産(abstractions)を事物化しないことが極めて肝要である。この不都合を避けるために、私はただ一つの手段しか知らない。それは我々のあらゆる抽象的観念の起源と生成とを展べ開く(développer)すべを心得ることである(o. c., I, V, § 14, p. 53 a)

——自ら《分析》analyse とよぶ方法²⁹⁾——これをディドロは、具体的に、かつその勧告者を超えて実践していくのである。

5. 一つの帰結——自然から歴史へ——

著者は、言語起源に関する思索の後、「それらの最初の真理に基づいて」(o. c., p. 188) 一つの研究方法——「分節音の使用を自ら禁じ、身振りによって自己表現する」(o. c., p. 138)「取りきめによる啞者」を「実験」に用いる方法——を提案し、更にその後、生れつきの聾啞者との対話その観察によって、感覚印象や観念と、他方言語構造との乖離の現象を明らかにしていくであろう。これは『試論』の身振り言語に関する仮設(a, c., II, I, ch. 1, p. 60 - 63)の検証に他ならない。

我々は最後に、言語起源論の終りにその帰結として書かれた考察をとりあげよう。それは語順転倒の主題にかかわり、同時に更に論理主義を解剖する。細部においては様々の訂正をもたらし、その先に行くとはいえ、これまでの著者の《方法》はコンディヤック的であった。言語形成の区分にせよ抽象観念の分析にせよ、いずれも観念的歴史であった。だが、今我々が立会うのは、現実の

フランス思想史とフランス語の歴史に関する一解釈である。まだ仮設の形で慎重に表明されるとはいえ、それは既に実証主義的仮設である。彼は書く：

以上より一つの結論を引出し得よう。それは、我々が古代諸言語において語順転倒と呼ぶところのものを、我々の国語においてもはや殆ど持たないのは、もしかしたら、全ての一般的・形而上的存在を事物化した逍遥学派哲学に負いはせぬかということである。実際、わが古代中代フランスの作家達（*nos auteurs gaulois*）は我々より遙かに多くそれを持っている。そして、我々の国語がルイ13世とルイ14世の治下完成されつつあった時に、この哲学が君臨したのである（*o. c.*, p. 137—138）。

一方でフランス語のいわゆる浄化と完成が行なわれる頃、哲学の場では、哲学を始めとする教育の場では近代アリストテレス主義、即ち末期スコラ哲学が支配していた。フランス語の「文の構築がおよそ一様で、そこでは実体名詞は常に、或いはほとんど常に形容名詞の前に置かれ³⁰⁾、動詞はそれらの間におかれる」（*o. c.*, p. 136）というこの画一的規則性は、この哲学の影響によるのではないか。これが作者の間である。我々がスコラ哲学と名指したのは他でもない。作者自身、アリストテレス本人のそれと「我々の逍遥学派哲学」とは非常に異っていたと指摘しているからである³¹⁾。

この仮設の評価としては、リッケンの文を借りよう。

歴史的展望を明るみに出したことから、ディドロは、彼の時代にとっては天才的な着想に導かれた。近代言語学が回帰せずにはおかなかった一つの説明原理を与えたのである（*Ricken, o. c.*, p. 127）。

これをもって、ディドロによる三ページ余りの言語起源論に関する我々の註解の結語とする。

註 釈

1) Cf. *Epistola ad Galatas*: (Vivo autem, jam non ego: vivit vero in me Christus) (II, 20).

2) D. Diderot, *Lettre sur les Sourds et Muets à l'usage de ceux qui entendent et qui parlent*, *Œuvres Complètes*, IV (Hermann, 1978). 以下引用はこのテキストによる。（*Lettre* または『書翰』と略記）。

3) J. Pommier, "Autour de la *Lettre sur les sourds et muets*", p. 263—264, *RHLF*, 1951（この論文その他の入手にあたり、西南学院大学の富盛伸夫、徳永雅彦両氏にお世話を戴いた。心から感謝したい）；J. Chouillet, "Introduction" à la *Lettre sur les Sourds et Muets*, *o. c.*, p. 111—113；U. Ricken, *Grammaire et Philosophie au siècle des lumières — controverses sur l'ordre naturel et la clarté du français*, p. 121—122 (Université de Lille III, Imp. 1978)に負う。

4) B. Lamy, *La Rhétorique ou l'art de parler*, p. 33, citée dans

- U. Ricken, *o. c.*, p. 62; J. Chouillet, note 18 de la *Lettre*, p. 136. ラミ自身、既に1701年には同じ箇所的大幅な変更を施す。Ricken, *o. c.*, p. 62-63 参照。
- 5) 主体、行為、客体の順序に基づくいわゆる明晰を《神話》、《隠語》と規定する R. Barthes, *Critique et Vérité*, p. 28-30 (Seuil, 1966); 西川長夫, 「フランスの明晰とは何か」, p. 46-54 (饗庭孝男編『フランス六章』, 有斐閣, 昭和55年); 蓮實重彦, 『反々日本語論』, p. 179 sq. (筑摩, 1977) 参照。
- 6) Condillac, *Essai sur l'origine des connoissances humaines*, II, I, ch. 12, § 117, p. 92 b, *Œuvres philosophiques*, I (P. U. F., 1947). 以下 *Essai* 又は『試論』と略記。
- 7) “Lettre de l’auteur, à M. B. son libraire”, *o. c.*, p. 131. また p. 147 も参照。
- 8) 実際には両者において影響は相互的である。『試論』とパークレイの観念論との類似を指摘した上でのディドロの挑発的示唆（『盲人書翰』）を受けて、コンディヤックは『感覚印象論』（1754）を書くことになる。G. Le Roy, “Introduction à l’œuvre philosophique de Condillac”, p. XVII, *Œuvres philosophiques*, I, *o. c.* 参照。
- 9) *Essai*, *o. c.*, I, IV, ch. 1, § 11, p. 43 b. 同じ主旨で、彼は1703年の科学アカデミーの報告する事例、聾啞者として生れ、23才にして初めて口をきいたシャルトルの青年のことを論じている。 *Ibid.*, ch. 2, § 13, p. 44 a sq.
- 10) *Ibid.*, p. 188. この要約の作品制作上の意味についてはポミエの推測, *art. cité*, p. 261 参照。
- 11) シュイエによる、テーマから見た作品の連串的構成 “Introduction”, p. 112 参照。
- 12) J.-J. Rousseau, *Discours sur l’inégalité* (1755), p. 146 sq., *Œuvres Complètes*, III (Gallimard, 1964). なお本稿においてはルソーに関する言及は全てこの作品に限られる。
- 13) 『スタンダード仏和辞典』（大修館、1968年、16版）は、この意味で “Faire abstraction d’une notion” なる例を与えている (p. 11)。
- 14) Cf. 「なぜならば、書くとは《既に》世界を組織することである。それは《既に》思惟することである（一言語を学ぶとは、いかにして人がこの言語において考えるかを学ぶことである）」 (R. Barthes, *o. c.*, p. 33)。
- 15) Voltaire, *Traité de métaphysique*, IV, p. 176, *Mélanges*, Biblio. de la Pléiade (Gallimard, 1961). 編集者 Heuvel によれば、これは「恐らく1734年に書かれ、1734年から1738年の間に幾度も手直しされ」、遺稿としてケール版(1784-1789)において初出版されたという (“Notes et Variantes”, p. 1418)。
- 16) Cf. Voltaire, “Lettre à Tournemine” (1735), *Correspondance*, I, p. 671, éd. Besterman (Gallimard, 1977); “Lettre sur l’âme” (1738), p. 43-44, *Mélanges*; *Le philosophe ignorant* (1766 ?), VIII, p. 864-865, *Mélanges*; *Dictionnaire philosophique* (1764), art.

“Corps”, p. 149–151, éd. de Etienneble (Garnier Frères, 1967); *Ibid.*, art. “Bornes de l’esprit humain”, p. 60; *Traité de métaphysique*, III, p. 172.

17) Cf. B. Pascal, *Pensées*: 「デカルト / 大まかに言わねばならない。それは形態と運動によって成される」 (Lafuma 84, Brunshvicg 79). これはデカルトの自然学を標的としている。フォージェールは『哲学原理』第三巻を例として挙げる (ラフュマ版, T. II *Notes*, p. 22, éd. du Luxembourg, 1952 参照). 同書第二巻 25 (p. 625), 64 (p. 652), *Œuvres et Lettres* (Gallimard, 1953) にも, 形態と運動が一对の原理を構成していることを我々は指摘する。

18) A. Arnauld et Cl. Lancelot, *Grammaire générale et raisonnée* (1660), II, II, 「名詞, 先ず最初に実体詞と形容詞」, p. 25 (Paulet, Paris 1969). 章の標題を看過してはならない。

19) G. Guillaume, *Leçons de Linguistique*, 1948–1949, Série C, p. 107–108 (Presses de l’Université Laval, 1973).

20) この点についてのポール・ロワイヤルと中世文法学の伝統 (ドナトゥスやプリスキアースス), 16世紀 (スカリジェール), それにラミとの比較は, R. Donzé, *La Grammaire de Port-Royal—Contribution à l’histoire des idées grammaticales en France*, p. 68 et la note 41, p. 201–202 (Francke, Berne, 1967 / 1971) 参照。

21) *Grammaire*, p. 26. 又同書 p. 27; Arnauld et Nicole, *La Logique*, I, ch. II, p. 47, éd. critique de P. Clair et F. Girbal (P. U. F., 1965) 参照。

22) スコラの種差 (différence) を説明しながら, アルノオとニコルは物体と精神の定義を例にとる。「かくて, 物体の種差は延長であり, 精神の種差は思惟であるだろう。つまり物体とは延長実体 (une substance étendue) であり, 精神とは思惟実体 (une substance qui pense) であるだろう」 (o. c., p. 61–62)。スコラからデカルトへの移行は造作ない。『書翰』に於ける物体の第一の定義 (une substance étendue, ...) と比較すべきである。

23) H. Aarsleff, “The history of linguistics and Professor Chomsky”, *Langage*, 46 (1970), pp. 570–585 が引用される。

24) D. Droixhe, *La linguistique et l’appel de l’histoire* (1600–1800)—*Rationalisme et révolutions positivistes*, p. 16–17 (Droz, 1978).

25) Chouillet, “Descartes et le problème de l’origine des langues au 18^e siècle”, *Dix-Huitième Siècle*, 4 (1972), p. 52–55 が引用される。

26) “Lettre à M. B.”, p. 131. この間の事情については, J. Pommier, *art. cité*, p. 263–264 参照。

27) Cf. Pascal, *Réflexions sur la géométrie en général*, *Œuvres Compl.* de Pascal, éd. Lafuma, p. 348–354 (Seuil, 1963) (これは1844

年のフォージェール版以来、恐らく誤って *De l'esprit géométrique* と呼び慣らわされている。またラフュマ版も十分な批判性をもたない)；Arnauld et Nicole, *o. c.* I, ch. XII, p. 86-90；II, ch. XVI, p. 164-167 参照。

28) 『試論』も「哲学者達」(les philosophes) — 全称の複数定冠詞に注意 — が「彼等の全ての抽象の所産を事物化した」という (*o. c.*, I, V, § 5, p. 49 b)。

29) *Essai*, I, II, ch. 7, § 66, p. 26 b 参照。この方法は、後に彼の『論理学』*La Logique* (1779) において更に明確化される。また『同義語辞典』*Dict. des Synonymes, art.*, “décomposer”, *Œuvres Philosophiques*, III, p. 179 a も参照。

30) “ toujours ou presque toujours ”。この保留については *o. c.*, p. 151 参照。

31) “ notre péripatéticisme [sic] ” p. 138 また p. 188 も参照。内容についてはシュイエの註釈22参照。

付記：脱稿の後に下記の論文を読むことができた。

1) M. Switten, “Diderot’s theory of language as the medium of literature”, *The Romanic Review*, 44, p. 185-196 (Columbia Univ., 1953)。

2) 原 宏, 「Diderot の言語論」, 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』, 11, p. 22-28 (1967)。

3) 中川久定, 「ディドロ『聾啞者にかんする手紙』のふたつの問題(1)」, 『紀要』15, p. 292-313 (名古屋大学教養部, 1971)。

4) 中川久定, 「十八世紀フランスの言語論 — コンディヤック, ディドロ, ルソー」, 『思想』572, p. 191-216 (岩波, 1972年2月)。

いずれも着眼点あるいは展望を異にしている、場合によっては、相互に(また筆者のそれとの間に)同じ文章の解釈にも相違がみられる。それは『書翰』の難解さと共に、これが、今やますます様々の読解や言説を触発していることを示している。